学位論文の要旨

論 文 題 目　スポーツにおけるトレーニングとマネジメントの統合に向けた身心学習研究
―現象学から生態学的組織論への思想的展開を通して―
A Study on Body-Mind Learning for Integrating Training and Management in Sports
―Through Philosophical Development from Phenomenology
to Theory of Ecological Organization―

氏　　名　　北川　修平

論文の要旨

本研究は、M. メルロ＝ポンティの現象学的身体論を基盤として、集団球技スポーツにおけるトレーニングとマネジメントを統合すること、また集団球技スポーツにおける新たな組織論と学習論の視座を提示することを目指すものである。これらの課題を通して、メルロ＝ポンティの現象学的身体論を集団球技スポーツにおける組織論へと理論拡張することと、スポーツ現場における組織運営の改善に向けた一契機となることを目的とする。さらに、本研究を通した通奏低音として現象学による暗黙知―LPP（正統的周辺参加）―ナレッジマネジメント―生態学的心理学の架橋と捉えなおしを行い、このことを通した現象学の学問的・思想的・歴史的発展と展開を明らかにすることが理論的意義として存在する。

本論文は、序論（①問題の所在、②先行研究の方法、③研究の方法）、第一章：メルロ＝ポンティの現象学的身体論、第二章：身体知を基盤とした個人知と組織知の統合、第三章：生態学的学習論、および結論となっている。

第一章は、メルロ＝ポンティの現象学的身体論における身体に焦点を当て、メルロ＝ポンティの身体に関する記述から、身体の新たな捉え方を明らかにすることを試みている。メルロ＝ポンティにおける身体は、自他未分の原初的世界から自他を裂開させるものであり、自他未分の原初的世界と自他分化の知覚された世界を架橋するための媒体や媒介として捉えられている。メルロ＝ポンティは媒体・媒介としての身体によって表出される知覚された諸対象について、媒質としての身体の原初的な多形現象のさまざまな結晶体と表現していることや、自他未分の原初的世界について母胎と表現していることから、身体を原初的世界という母液から、ある知覚されたものという結晶体を凝集させる触媒として新たに捉えることが可能であることを明らかにしている。また、メルロ＝ポンティの現象学的身体論を整理すると、まずわれわれが現に動かす現象的身体が存在し、現象的身体は潜勢的身体（習慣的身体）と現勢的身体の２層から成り、現象的身体の二次的な表現として科学的な見方によって構成される客観的身体が存在する。

第二章は、身体知と暗黙知、さらに身体知と組織知の概念的区分を、現象学的身体論を基に明らかにし、現象学からの組織の分析と現象学に思想的基盤を持つナレッジマネジメントから生態学的組織を提示することを試みている。身体知は、マイケル・ポランニーとの関わりで述べられることが多く、両者の概念的区分には身体知⊂暗黙知、身体知＝暗黙知、身体知⊃暗黙知の三つの立場が存在する。これらの立場についてそれぞれ考察を行い、身体知は言葉や意味などによって表現可能な領域を持つことから、身体知を決して語ることができない暗黙知として捉えることによっては矛盾が生じるため、身体知⊃暗黙知として捉える必要があることを明らかにしている。次にこの身体知と暗黙知の概念的区分の考察を踏まえ、身体知と暗黙知の構造を現象学的身体論から明らかにすることを試みている。ポランニーの暗黙知の思想的基盤にはメルロ＝ポンティの現象学が存在し、共通した事例に対するポランニーの暗黙知に関する記述と、メルロ＝ポンティの身体図式に関する記述から考察した結果、暗黙知と身体図式は語ることができない知の同義語の関係にあることを明らかにしている。このことから、現象学的身体論における潜勢的身体における知として暗黙知は存在し、それは現象学の言葉では潜勢的身体知と言い換えることが可能であり、暗黙知（潜勢的身体知）が現勢化した現勢的身体知が存在し、これらが統合されたものとして現象的身体が獲得する知として身体知を捉えることが可能である。一方で、ポランニーにおいて明示的知識と表現される辞書的な定義や概念としての知は、記号を介して表現可能になる知であるため、二次的な表現である客観的身体に対応し、それは客観的身体知と呼ぶことが可能であることを提示している。

そして、現象学的身体論を通して明らかにした身体知の構造を基盤とし、個人が持つ身体知と組織知の考察を試みているが、両者の関係を明らかにする際に用いたのがメルロ＝

ポンティの現象学における二重感覚である。メルロ＝ポンティは私の身体が一つの器官として認知される理由を、私の身体で二重感覚が生じる点に見ている。さらにメルロ＝ポンティは二重感覚を私と他者においても生じることを通じて、私と他者が一つの器官である間身体によってつながれていることを示している。このことから、二重感覚によって私と他者に共通する身体をメルロ＝ポンティが見出したように、私と複数人の他者という系においても二重感覚がそれぞれ成り立つのであれば、組織を一つの器官としての身体と捉えることができ、身体知の構造における現象的身体に組織を置き換えることが可能である。すなわち、組織知には現勢的組織知と潜勢的組織知が存在し、これらが統合したものとして組織知は存在する。一方、概念やマニュアル、手順書といった語られた言葉で形成される組織知の二次的な表現として客観的組織知が存在する。このように組織知と身体知は同じ現象学的構造を持つため、組織知と身体知は自己相似的な構造、すなわちフラクタルをなしていることを明らかにしている。このように組織を私と他者からなる一つの身体と捉えることは、組織の成員が自他の境界を越えて自他未分の身体性を持つことによって可能になり、自他未分の身体性を持つ具体的な組織としてアメーバ経営といった自律分散型組織が提示される。他にも自律分散型組織の具体例として、組織を生命体や生物、有機体として捉えるティール組織を挙げることができ、このような生命体・生物としての生態学的組織が、本研究において目指すべき組織として提示している。

第三章は、生態学的組織を集団球技スポーツにおけるトレーニングを通してどのように構築するのか、また集団球技スポーツにおいてトレーニングとマネジメントを統合するための新たな組織運営方法の提示を試みている。第二章は主に生態学的組織における組織を明らかにしているが、第三章では生態学的組織の生態学に焦点を当て、メルロ＝ポンティの現象学に思想的基盤を持つ J. J. ギブソンの生態学的心理学を基軸に考察している。ギブソンの生態学的心理学とは、アフォーダンスやニッチの概念で示されるように、知覚と行為の相補的な関係を担うものとして身体と環境を捉える立場である。そのため、生態学的組織とは、自己と他者からなる一つの身体としての組織とともに、環境へと拡がる組織である。

次に、集団球技スポーツにおけるトレーニングを通して生態学的組織を構築していくために、生態学的心理学を思想的基盤に持つエコロジカル・トレーニング（以下「エコトレ」と略記）のトレーニング理論や、エコトレを通して獲得される身体性を考察している。エコトレの思想的基盤には、生態学的心理学とダイナミカル・システム理論が統合されたエコロジカル・ダイナミクスが存在しており、理論的原則（アフォーダンスへの知覚的同調・準安定状態における適応的運動性の探索・神経生物学的システムの縮退の利用）⇒方法論的原則（個人的制約・環境的制約・タスク制約）⇒一般原則（注意の教育・較正の教育・意図の教育）がフラクタルな構造をなしているトレーニング理論であることを明らかにしている。このエコトレを通して選手同士が相互浸透することによって、個々の選手のニッチから一つの身体としてチームのニッチを形成し、一つの身体としての生態学的組織が構築される。このような生態学的組織をエコトレから捉えると、多数の個体から構成されるものの一つの個体のように振る舞う超個体として提示することが可能であり、超個体としての集団球技スポーツにおけるチームは、イワシの群泳のように外的負荷に対して可変的な形態をとることによって構造的安定性を獲得することができる。

本研究では、集団球技スポーツにおけるトレーニングとマネジメントの統合に向けて生態学的組織という新たな組織論の提示を試みたが、生態学的組織をトレーニングの側面から捉えたときには超個体と呼ぶことができ、マネジメントの側面から捉えたときにはティール組織と呼ぶことが可能である。超個体と自律分散型のティール組織はともに生物の比喩で表現できるように、生態学的組織の同義語であり、本研究の考察を通して提示するトレーニングとマネジメントの統合とは、生態学的組織に向けて、トレーニングの側面からは超個体を目指し、マネジメントの側面からはティール組織を目指すことで、トレーニングとマネジメント双方を通して共通した生態学的組織という組織を達成するものである。

このようなものとして組織を把握することは、可視的な皮膚の境界を越えて相互浸透する触媒としての身体によって可能になる。触媒としての身体が相互浸透した一つの身体として組織を捉えることは、組織を発展・成長させることにおいて暗黙の裡に受け入れてきたつながりやまとまりという曖昧な質的な表現に対して、新機軸をもたらすものになると考えられる。しかしながら、本研究は集団球技スポーツに焦点を当てたものの、種目別のトレーニング理論までは考察することができなかった。また、本研究を通して明らかにした生態学的組織の構築に向けた理論を、学校現場やスポーツ現場に対して導入する実証実験を行う必要があると考えられる。これらは本研究の限界と今後の課題とする。